

大震災で被災した岩手・野田村

復興過程 研究者の目で

支援する弘大など13人が分析、本に



東日本大震災で被災した岩手県野田村で支援活動を行ってきた弘前大学など8大学の研究者13人がこのほど、復興プロセスを分析した本「たちあがるのだ—北リアス・岩手県九戸郡野田村のQOLを重視した災害復興研究」を出版した。同書はシリーズ「東日本大震災からの復興」の第3巻で、最終刊。

同書は同村の復興過程について、社会学、社会心理学、法学、経済学の分野から分析。遠隔地からボランティアが行く意義や、村外から派遣された応援職員の役割、被災住民が移住する際の決定要因などについて、生活の質(QOL)の観点も含めて研究している。

監修した弘大人文学部の李永俊教授は「災害関連の研究では、長期間にわたって地域の移り変わりを研究したものが少



李永俊教授 たものが少

「たちあがるのだ」④が発行され、シリーズ3冊の表紙を合わせると野田村の十府ヶ浦海岸が広がる

ない。復興過程のさまざまな問題を伝えることで、研究が次の災害に備える資源になる」と語った。

同シリーズ全3冊の表紙を並べると、同村の十府ヶ浦海岸が広がる。第3巻は3月11日、弘大出版会から発行された。全281頁、3400円(税抜き)。全国の主要書店で注文できる。

※この記事は東奥日報社の提供です。

[問合せ先]弘前大学出版会

hupress@hirosaki-u.ac.jp

この画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。